

僕と君はちがうんだ。

上巻



著：ノムラたけし・春宮

その日は西口で海賊版のビデオを買おうと思ってたので、春宮の誘いは都合がよかった。たまにはションベン横丁でホッピーも呑みたかったし。

いつもの店につくと春宮は相変わらず焼酎のお湯割を呑みながらいつもの隅のテーブルに座っていた。

買って来たばかりのビデオを自慢している時に、それをさえぎり春宮の口から出た言葉はオレを愕然とさせた。

「え、就職？だって春宮、お前文学賞とるって言ってたよな！物書きになんだろ？」

ショックだった。このクソ寒い中出向いてきたらその一言だ。

多分、春宮はもう物書きになろうと本気では思っていないんだろう。

だって、そうだろう？

物書きになるんだったら、定職なんて逃げ道は必要ないんだから。フリーターしながら毎日自分の作品を書いていけばいいんだ。阿呆だな、これからは作品を書く時間をどんどん会社に吸収されていくのか。

春宮の書く小説は好きだったが、これでもう読むこともないな。大した時間もかけずに書いたものなんざ、タカが知れてる。どれだけ才能があろうが社会に迎合した時点でもう負けだよ。

オレは就職なんかしない。髪だって切らないし、髭だってそらない。オレはミュージシャンになる、くだらない逃げ道なんか必要ないんだ。

ションベン横丁の店で、ホッピー呑むんならOKだ、とノムラはいった。

ちょうど西口で海賊版のビデオを買う用事があるから、とも。

昔から粋なやつだった。迷惑そうにしながらも、結局はつきあってくれるのだ。前の晩、急に誘ったのにも関わらず。

ぼくはどうしても、あいつと酒が呑みたかった。

あいつにだけは、ひとこと言っておかなくてはいけないと思ったからだ。

買ったばかりのオアシスの海賊版を取り出して、「はじめてマイ・ジェネレーション演ったときんだよ」と、うれしそうにノムラは言って、すぐに「お前はブルー派だからな」と顔をしかめた。

いや、どっちも好きだよ、なんて返したら、あいつが怒るのはわかっていた。でもぼくは、そんな風に言わなければならなかった。あの日ばかりは。

音楽とか、演劇やなんかなら、自分の感性をぶつけるだけで、表現できるだろう。聴いたり、観たりするのに、理屈なんて必要ないから。

でも小説はちがう。わざわざ読んでもらうのだ。感性だけ書きつらねたって、読者は退屈してしまう。

むしろ、文学的でないこと、現実的なことをこそ、より多く描かなければいけないのだ。

夏目漱石の小説を読んで、ぼくはそれに気づいた。

ぼくは、もっと社会を、現実を知らなければいけない。

だから、就職する。髪も切るし、髭もそる。

いい小説を書くために。

明け方、ライブの打ち上げも終わり始発に乗り込むと、通勤客とは逆方向に電車は動き始めた。
ガラガラの電車の中でオレらはタベのライブの事を大声で話していた。

ギターをミスったこと、ヴォーカルのMCが下手なこと、
対バンがムカついたこと、くだらないことを話しながらガハハと笑っていると
電車は川口駅へと到着した。

駅から出ると桜が見事だった。"春はあけぼの"とはよく言ったものだ。

せっかくだから花見でもしようと
ワンカップを買って適当に座り込んだ。

話すことはやっぱり音楽の話だ。
ビートルズのアンソロジーはどうだの、
やっぱりオエイシスじゃねえのか、
だのと評論化気取りでしゃべり続けた。

そのうちに誰かが

「なあ、桜の枝折ったらさ、大統領になれるらしいぜ」

なんて言って枝を一本折って振り回した。

折った枝からハラハラと舞い散る花びらの向こうに
背中を丸め出勤する人達の姿が見えた。



俺は絶対にあんな風にはならない。

桜舞う飛鳥山公園で、ぼくはビールを注いでいる。

赤ら顔の上司が、春宮、おれにもいい女紹介しろよ、
などといってへらへら笑っている。

くそつたれだ。

この国では、大学を出てないとまともな上司も選べないらしい。

サラリーマンになって1年。

ここへくると、どうしても思い出してしまう。

プロのドラマーをめざしているノムラや、哲学者を志すナガシマ、詩人としてアングラじゃちょっとした有名人だったうさぎたちなんかといっしょに、
毎年のように花見をしたことを。

それぞれが、それぞれの芸術論を語って、それぞれの表現手段を模索していた。

んだったらカッコいいが、実際は酒を呑むと、そこらへんの連中と同じように、好きな女とか、男とか、バイトの愚痴なんかばかりしゃべっていた。

それが、楽しかった。

あいつらは、どうしているだろう。

ノムラとは1年以上連絡をとってないが、ちゃんと夢を追っているだろうか。
まだぼくのことを怒っているだろうか。

つまらない会社に就職したぼくのことを。

腹がへったら立ち食いソバに入り、客にどなられたらぺこぺこアタマをさげ、
徹夜で花見の場所取りをしている、
ここ1年、1作も書いていないぼくのことを。

入社して3日目には、もう辞めたくなった。

けれど、3年は続けてやる、というのが、
ぼくなりのこだわりだった。

もちろん、履歴書の見栄えを気にしてるわけじゃない。



ノムラと、もう1度ここで花見をするためだ。

家に着くと玄関に座り込み、オレは靴を脱いだ。

もわっ湯気が上がり足は締め付けから解放された。
雨合羽を脱ぎ、ばさばさと雨粒を玄関先ではらうとそのままシャワーを浴びに向かった。

梅雨は嫌いじゃあないが、こう雨が続いたんじゃさすがに気が滅入ってくる。
洗濯物どころか髪だって乾きゃあしない。

それにこの雨の中、外でバイトをするのももううんざりだ。
いくら夏が近いったって、
これだけ雨を浴びてりゃあ体だって冷えてくる。
風邪をひいてバイトを休むわけには行かない。

稼がなくては……

稼がなくては欲しいスネアが買えないし、スタジオでの練習代も出せないし、
ライブ代も捻出できない。

なぜオレは、音楽で食って行くつもりなのに音楽に金を払っているのだろう？

そう思うと雨のなかバイトをしているのが急に馬鹿らしくなった。

これは、先行投資なんだ。そうとでも思ってなけりゃあやってらんねえ。
毎晩の晩酌だけを楽しみにしている現場のオヤジたちと一緒にするな。

明かりもつけず「どっちの料理ショー」にハラを鳴らし、いいちこを呑みながらオレは思った。



板橋駅近くの路上に営業車を停めて、町田町蔵、いや町田康の「くっすん大黒」を読みふけている間も、雨はじっとりと降り続いていた。

けれども、あまりの面白さに、天気鬱陶しさなど忘れてしまう。

あの「メシ喰うな！」のパンク歌手がはじめて書いた小説なのだが、はっきりいって、専門の作家よりよっぽど面白い。まるで、あいつが書いているみたいだ。

あいつ。そう。ノムラ。

サラリーマンになって2年、立ち食いソバ屋に入るのにも抵抗がなくなったし、名刺を配ってまわる仕草もだいぶスマートになった。仕事にもいくらか慣れて、こんな風にさぼることもできるようになった。

そして今、町田康の小説を読んで、創作意欲がつつつと湧き上がるのを感じている。

サラリーマンなんて仮の姿だ。不細工なスーツを着てはいるが、魂まで売ったわけじゃない。

ぼくは小説を書く。新人賞を取る。

そしたら、こんな会社とはすぐオサラバだ。もちろん、3年間も待ちはしない。

ノムラに言ってやろう。社会人になった経験は、けっしてムダではなかったと。

おかげで、「領収書」と「請求書」の区別もできるようになったし、「厚生年金」とか「住民税」の意味も理解したし、クルマの運転も格段にうまくなった。

こんなことを言ったら、

あいつは怒るところか、呆れてしまうだろう。

けれども。

こんなつまらないことすら、
ぼくらは知らなかったのだ。できなかったのだ。
世の中がどんなものかもわかってないやつに、美しい物語など書けはしない。

現実のひどさをわかっているからこそ、すばらしい幻想を創りだせるのだ。

小説は、人間を描くものなのだから。

突然の夕立にびしょびしょになりながら
ミーティング場所のファミレスにオレは到着した。

ミーティングとはいってもなんの事はない、ただのおしゃべりだ。
バンドの話なんかは最初の5分くらいで
後はパフィーのどっちが好きだとか、

「あの、モーニング娘。ってなんだよww」
だのと他愛のない話で盛り上がる。

気がつくと深夜。

明日も仕事があるので、ぼちぼち解散か・・・
しかし、そうなってからなぜかバンドの話が始まる。
終わりくらいになってからミーティングだったということに
メンバー全員気がつくのだ。

ライブの日程、セットリスト、演出、練習日などを取り決め解散となる。
もう何度となく繰り返されている日常だ。

家に帰り布団に入るとなかなか寝付けなかった。
そういえば何年か前春宮は、

「小説は手にとって読んでもらわなければいけない」

なんてこと言ってたな。

オレらもただ垂れ流しにするライブだけじゃあなく
形として手にとって評価してもらわなければいけないんじゃないか？
考え事をするとますます眠れなくなっていった。



クーラーがないために暑くて眠れないわけではない。

いい小説を書くためには、年がら年中原稿用紙と向きあっていけばいいというものではない。

他人の小説を読むのも重要だし、小説以外のことを考えるのも重要だ。
そしてなによりも、「生活」することがいちばん大事だ。
身体を動かしていなければ、脳だって動かない。

とはいえ、お盆のようなまとまった休みは、やはり執筆にあてたい。

サラリーマン、とくに営業職をしていると、自分の時間をつくるのは、なかなか大変だ。
くやしいが、ノムラの言ったとおりだった。

でも同僚には、母方の本家に行くと言ってある。
そうしないと、やれサーフィンだの、やれバーベキューだのと、いろいろとうるさいからだ。

ずっと家にいて執筆してるなんて言ったって、誰も信じやしないだろう。



問題は、リョウコにどう説明するかだ。

彼女とは、夏のはじめ、化粧品会社のOLとやった合コンで知り合った。

リョウコは、海とか山が大好きらしい。

同じくらい文学も好きらしいが（そうでなければぼくとつきあったりしないだろう）、やはり休みには、どこかに出かけたかった。

2度以上セックスした相手に、嘘をつくのはかなり難しい。

しかも今後、ずっと嘘をつき続けなければならない。

かといって、ほんとうのことを言って理解してくれるほどの深い間柄でもない。

というか理解してくれる女が、この世にいるとは到底思えない。

そんなことを考えているうちに、

携帯電話からシャンプーの「デリシャス」が流れてきた。

リョウコのお気に入りの、彼女専用の着メロだ。

ブロードウェイの支店に用があって中野にいるから、
いまから食事でもどうかということだった。

ことわる理由を思いつかなかった。

自分から手にとって、
自分から上になったリョウコは、
お盆休みは山中湖でバーベキューをしたいらしかった。

ことわる理由を思いつかなかった。

「所詮できレースだろ？本気になってもしょうがねえよ」

公開オーディションの帰り、メンバーの一人がそう言った。
審査員に言われたことの内容なんかどうでも良かった。
自分の欠点を認めようとしないうメンバにオレはイラついていた。

「あんなところじゃオレらの力はわからない。そうだろ？」

じゃあ、参加しなければよかったんじゃないのか？

「結局、コネなんだよ。実力なんてない奴らばっかだったじゃん」

コネを作るだけの努力をオレらはしたのか？

「売ればいいってわけじゃないしね」

それなら、プロになりたいとか言うなや！

成功後のビジョンなんかは語り尽くした。
いまはそこに行くまでの途中なんだ。

いつまでも続く途中、途中、途中、途中……

メディアの中の人達は苦労話はするけれども、プロセスを多くは語らない。

ふと、何年か前に春宮が言っていた
「もっと社会を、現実を知らなければいけない」

という言葉が頭をよぎった。

夢を語るのはもう飽き飽きだ。
オレらももっと現実を見なければいけない時期に来てるんじゃないのか？
事実オレらはフリーターだ。趣味で音楽をやってる連中と何ら変わりはない。



冬が来ようとしていた。

年末までに、「文学界新人賞」に投稿する作品を、是が非でも仕上げなければならない。

なぜなら、そろそろ地球が滅亡するからだ。

そんなつまらない冗談を、平気に口にできるようになったのも、
きっとリョウコのおかげだろう。
彼女との関係が、こんなに長く続くとは思ってもみなかった。

小説家を目指しているということは、会社の連中には秘密にしていた。

パチンコとキャバクラしか知らない連中にそんな話をしたって、理解できるはずないからだ。
当然、合コンの席でも文学の話はまったくしなかった。

てきとうにマジメで、てきとうに遊び人で、てきとうにカネを持っている、
脳天気なサラリーマンを演じた。

それでも、文学なんかをやっていると、ちょっとした蘊蓄とか、教養っぽいものが、
雑談をしているうちにぽろぽろ出てくる。

パチンコとキャバクラしか知らない連中と比べたら、
必然的に知的に見えてしまう。当然といえば当然だ。

そんなぼくを見て、リョウコは「ちょうどいい」と感じたはずだ。

まさか、四六時中本を読んで、
四六時中小説のことを考えている人間だなどと、想像もしなかったにちがいない。

つきあいはじめてから1ヶ月後、
ぼくは小説家志望であることを告白した。

彼女は「カッコいい」といって笑った。

彼女の知り合いのついでで、クルマを買った。
おんぼろの外車だったが、デートの道具としては最高だった。
行きたいと思ったなら、
伊豆でも鎌倉でもすぐいけるようになった。
夏の終わり、ぼくらは衝動的に箱根まで走った。
峠の中腹で、夜景を眺めながらセックスするためだ。

そしてぼくらは実行した。

ウェットティッシュをリョウコから渡されたとき、
クルマのラジオから、
オアシスの「リヴ・フォーエヴァー」が流れてきた。
今のぼくを見たら、ノムラはどう思うだろう。
クルマなんか乗りながら、
小説考えられんのかよ、とバカにするだろうか。

音楽を聴くことが好きだけだったのが、楽器を弾くようになり、ステージに立つようになり、今はツアーにまで出るようになった。

オンボロのハイエースにありったけの機材を積み込み
曲がりくねった山道を走って目的地を目指していると
古臭い青春映画のエンディングのようで気分がよかった。

夜、ライブが終わるとで車の中で眠った。
妙に興奮が収まらず誰もが寝付けないようだった。

「なんだか、夢みたいだな」
口に出してボソッと尝试してみるとメンバーは黙ってうなづいた。

4日目、夢は覚めてきた。

足を伸ばせずに眠る日々、閑散としたライブ
移動中に誰かがかけるBGM、ちょっとしたことが気になるようになってきた。
それはオレだけでなく、メンバー全員が感じているようだった。

それから3日、家に帰ってきたオレは
何も入っていないとわかっている冷蔵庫を開け
ため息をひとつつくと、ぐちゃぐちゃの布団にもぐりこんだ。
足を伸ばして眠れることがこれほど快適なこととは思わなかった。

しかし、足を伸ばして眠れることより
メンバーから解放されたことがなによりも嬉しかった。

朝起きてFMをつけるとU2の"Beautiful Day"が流れてきた。

映画だったらエンディングだったはずなのに、現実はまだ続くんだな。
そういえば何年も会ってないが、春宮もU2が好きだったな……



吐く息を白くさせながら、オレはバイトへと向かった。

ぼくは12月生まれということもあって、
暮れのこの雰囲気が好きだ。
街の空気が圧縮されて、いやでも気分が高揚してくる。

きっとぼくが愛する19世紀末のイギリスも、
こんな感じだったんだろう。

でも今年は、それだけじゃない。

いよいよぼくにも、
自分の文学を完成させる日が近づいてきたのだ。
春に発表された「文学界新人賞」で、
ぼくが作品が1次予選を通過していた。
つまり2次で落ちたということだが、
勢いに任せて、2,3日で書き上げたものにしては、悪くない結果だ。
まあ少なくとも、日本語の小説として、
体をなしてはいたのだろう。

参考までに、何回か前に受賞した、
吉田修一の「最後の息子」を読んでみた。

出来はたいしてかわらない。
登場人物とかテーマなんかは、
ほとんどぼくのと一緒だった。
あとは、よけいな言葉を
きっちり排除出来ているかいないかの違いだけだ。

リョウコは喜んでくれた。
けれども、どこかさびしそうだった。

もしかすると、自分以外のものに熱中している彼氏を見て、
不安になったのかも知れない。

彼女の不安は適中した。
ぼくはお盆休みに、次の「文学界」をねらう作品を書くために、
彼女と北海道へ旅行に行く計画を、
直前になってキャンセルしたのだ。

自分だけを見てくれない男なんか、
リョウコには必要ないらしかった。

望むところだ。彼女のおかげで、
女性についてのさまざまな知識を得ることができた。
心理とか潜在意識とかももちろんだが、
なにより、化粧品の種類とか、生理用品の名前なんかについての、
一見つまらない知識が増えたのは、
もの書きにとってありがたかった。

もうリョウコに用はない。彼女の役割はおわったのだ。
ぼくには、へらへらスノーボーをやったり、
たらたらドライブしているヒマはない。
一刻もはやく、おのれの文学を完成させなければならない。

そろそろ、あいつにも連絡をとってみようか。

あいつ。ノムラたけし。

ナガシマが有名な哲学者に弟子入りしたとか、
うさぎが自由詩のコンクールで入選したというのは知ってるけれど、
あいつがデビューしたなんて話は聞いたことがない。

ぼくの正しさを、証明してやってもいいところかも知れない。

下巻に続く

僕は君とはちがうんだ 上

発行日：2010年12月24日

著 者：ノムラたけし 春宮

撮影・編集：さとうしゅういち

発 行 所：彩林堂出版 <http://blogs.dion.ne.jp/1ststep/>

表 紙：CAMEL STUDIO (URL:<http://sound.jp/camelstudio/>)
